

風雅無限 松隈義勇

——芭蕉終焉の「枯野」の句——

梅雨の今にも降り出しそうな空の下に大阪の町は黒ずんでいた。

新大阪駅と梅田駅とを結んで大都市の中心部を一直線に南に走る地下鉄御堂筋線を本町で降りて御堂筋の幹線道路路上に出る。西側歩道を中心橋方面へ向つてももの三、四分も歩くと、東本願寺の難波別院がある。これが昔から南御堂または裏御堂として知られた寺院であるが、入口の構えはコンクリート造りで、隣の伊藤忠商事の社屋の広大なビルと並んで、さして場違いの感もない。

反対側の歩道に渡る。南御堂と相對する辺りに和歌山相互銀行支店がある。その前の所で、車道をくぎる分離帯緑地（グリーンベルト）に切れ目が設けてある。その端に近い緑地内に、一メートル半ぐらいの角石の標柱がぼつねんと立っている。氣を付けないと見過してしまいそうであるが、「此附近芭蕉翁終焉ノ地ト伝フ」と南面に刻んだ文字は歩道上からも読める。歩道と緑地帯の間さえ車の疾駆は間断ないので、緑地帯まで辿りつくのは大変であったが、手を挙げるとそれでも車は速力をゆるめてくれたので辛うじて石標の前に立つことができた。昭和九年三月に大阪府が建てたという説明が右側面に刻んである。

この町筋は会社や商店が軒を連ねた経済機軸一点張りの、かなり殺風景な雰圍氣で、町名こそ南久太郎町と古い名が残っているが、芭蕉終焉の地といえるようなおもかげは尋ねようすべもない。しかし、この町なかの排氣ガスと塵埃の中に忘れられたように寂然と立つ石標は、その孤獨の姿をもって、氣付く者に独特の強い存在感を印象させるように思われる。

信号のある所から引返して、南御堂の境内にはいった。前庭を広くとり正面に本堂がある。その向つて右側の西北隅に緑樹など植え、て風情をしつらえた奥にひっそりと句碑が立つ。

旅に病てゆめは枯野をかけまはる

裏面を見ると、当地の宗匠たちがかつて南御堂内に建てたものとわかる。昭和十年に現在終焉地の石標のある傍らに移され、また昭和三十七年の道路改修の際に御堂境内に戻されたのである。

碑面の句の座五は「まはる」と表記されているが、これは路通の「芭蕉翁行状記」の伝える句形に拠つたものであろう。しかし支考や其角は「めぐる」として伝えているし、音調上からもその方に従

うべきである。

芭蕉は元禄七年の旅の途次大阪に来て、陰曆九月二十九日に泄痢の症状を發してついに起たず、十月十二日の申の刻に永眠した。ここの南御堂前の花屋仁右衛門方の後園にある貸座敷の一室であったと伝える。花屋については志田義秀博士の『問題の点を主としたる芭蕉伝記の研究』に精確な考証がある。それによると花屋とは南御堂の立花の下草(材料)を請負う商いに由来する屋号であつたらしい。支考はその名に触れず、「御堂の前しづかなる方」と記している。

その静かだった跡がこの付近とは、——その余りの思いがけなさに、私はしばらく徘徊してあれを思いこれを考えた。そのうちにだんだんとこれでよいのだという気がしてきた。無常の觀に住し、一所不住の漂泊者として生きることを自らに課した俳諧師の帰泉の跡として、この雑沓、鞞撃の道路上ほどにふさわしい場所は考えられないうように思われてきた。かの石標はまさに象徴的である。

この時の旅は初め九州までも足を延ばしたいという念願もあつたらしいが、身体の調子が必ずしも良くはなく、衰老を覚えて、郷里伊賀と京や湖南の間でぐずぐずしているうち、大阪へ出向く必要が起つてきた。湖南の蕉門のあとおしによつて大阪へ進出した氣鋭の酒堂(珍碩)と、この地蕉門の中心人物だった之道との間に生じた氣まずいしこりを調停するためである。健康が十分でない折から、大阪の旅費が氣の重いものであつたことは想像に難くない。それでも俳席を勤め、九月二十六日には「此道や行人なしに秋の暮」「此秋は何で年よる雲に鳥」のような、衰老、孤独寂寥の思いのあらわな吟を詠じた。翌二十七日の園女亭の俳席の折に好物の茸を食べ過

ぎたのが発病の直接の因というのは俗伝で、既に早く、芭蕉の生命は害われつつあつたものと思われる。そして、二十九日から之道亭で寝込むということになる。

芭蕉の臨終の様様を直接伝える文献としては、支考の『追善之日記』と『笈日記』、其角の『枯尾花』それに路通の『芭蕉翁行状記』など、直門の筆に成る諸書がある。とりわけ支考と其角は臨終の枕頭に侍つたので信頼できる。

「枯野」の句の成つたのは八日夜のことだが、その前後の事情について、支考の『笈日記』はこう伝える。

此夜深更におよびて、介抱に侍りける吞舟をめされて、硯の首のからく／＼と聞えければ、いかなる消息にやとおもふに、

病中吟

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

翁

その後支考をめして、なをかけ廻る夢心といふ句づくりあり、いづれをかと申されしに、その五文字はいかに承り候半と申はいとむづかしき事に侍らんと思ひて、此句なにかかおと候半と答へける也。いかなる不思議の五文字か侍らん、今はほいなし。みづから申されけるは、はた生死の転変を前にをきなながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もや半百に過れば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の声におどろく。是を仏の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへす／＼くやみ申されし也。さばかりの叟の辞世はなどなかりけると思ふ人も世にはあ

るべし。

『追善之日記』では「はた生死の……わざにもあらねど」の一節が「是をさへ妄執（まがたま）の一方とおもふに」となり、「此後は……おもふはと」の部分（まがたま）が省かれるなどしている。一方、其角の『枯尾花』中の「芭蕉翁終焉記」が伝えるところは少し違っている。

壁をへだて、命運を祈る声の耳に入れるにや、心弱きゆめの
さめたるはとて、

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また、枯野を廻るゆめ心ともせばやと申されしが、是さえ妄執ながら、風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也、と悔まれし。

其角の文章によると、俳諧は妄執と知りつつも道を切に思うゆえにその妄執が捨てがたいという言い方であり、支考のでは、妄執となる俳諧を忘れたいという言い方と解される。ニュアンスは違うが、つまりは生死の大事を前にして風雅の執着の断ちがたい悩みを述べたわけで、こういう意味のことを芭蕉が言ったことは確かであろう。風雅の妄執を去って心静かに死を迎えたいという願いと、どうしてもその妄執の断ちがたい思いとのディレンマがあったものと同常は解せられている。志田義秀博士はこのようなディレンマに懸った懺悔の心を表白したものだとして解釈している。加藤楸邨氏は「人生と芸術との相剋になやむ姿でありながら、そこにこそ、この矛盾の故にこそ、最も迫力ある心の歴史を表現したともいへるのである。真の芸術はむしろかかるものであらう」と評している。

それでは「枯野」の句じたいに人生と芸術との相剋・ディレンマに悩む芭蕉の心が詠出されているだろうか。しばらくそのことを考えてみたい。

旅（まがたま）に病て夢は枯野をかけ廻る

『笈日記』や『枯尾花』が伝える、芭蕉のこの句を発表した際に漏したかの懺悔めいた言葉を踏まえて、この句を有難がる人は跡を絶たない。一例をあげると、荻原井泉水氏は「全人的の気魂そのものゝ叫びである」として「絶唱」と讃嘆した。加藤楸邨氏は先ほどの文章に続けて「この悲憂を極め、凄愴（せいかん）の相を帯びた句の前に、風雅の凄烈なまかひを感じて、私は頭を垂れるのみである」と称讃し、井本農一博士は「この不世出の詩人の最後を飾るにふさわしい名句であり、もうここまで来ると名句という言葉がしらじらしく感じられるような句である。」といい、「およびがたいことの歎息を持つのではあるまいか」と結んでいる。風雅の至境と見るか、芸術への執着の凄愴さを見るかの違いはあるが、芭蕉の全人格のほとばしりの結晶したような絶妙の句と見る点では一致している。

こう大家に口を揃えて讃嘆されてしまうと、言葉をはさむ余地もなく引退らざるをえない気持になるが、私は従来からどうもこの句の、その至極のすばらしさというものがわからないでいた。芭蕉さんの最後の吟だとか、芭蕉がどう言ったとかいう曰く（いひ）をかなぐり捨て、七宝荘殿の道具立てを剣ぎ取って、素裸かにしたこの句だけを目前に置いて冷静に味わった場合、それほど不可説底の深秘玄妙な絶唱だとはどうしても思えないのである。

自分の鑑賞眼の悪いせいかと思っていたところが、最近出た『芭

蕉奥の細道』（日本の旅人6）で、著者の安東次男氏が、この句をずばりと不出来な句だときめつけているのに出会った。「切字の働きのない、散文の切れはしのような句」とも、「誇り高き俳諧師が最後に誇りを捨てたのではないか、と思わせかねない異体の句」とも言っている。思わぬ味方を得たようにうれしくなったので、いささか尻馬ののってあげつらってみよう。

この句の欠点を言わせてもらうならかなりある。まず切字の働きのないというその根本的な欠陥からして、発句の美学の基本ともいへば二句一章のディアレクティクが欠けている。一本調子で、行きて帰るといふ発句独特の味わいも乏しい。それに切字なしだといふのに座五が現在形の動詞止である。この点から、発句として破調であるばかりでなく、異体であるといわざるを得ないのである。短詩といったほうが適当なような感じさえする。

以上はおもに形の上のことだが、次に意味のほうから考えてみる。素材の面からいうと、風狂漂泊の俳諧師芭蕉のトレードマークともいえる道具立てを格好よく並べあげただけという憾みがある。そうだとすると「旅に病で」など実に抽象的概念的で、説明に過ぎない。そればかりか、「枯野」が道具立てとしてこれに即き過ぎる。だから内面的な美が生れないのである。その「枯野」だが、これが象徴の意味を持って用いられていることはすぐわかることだが、この程度の象徴なら中学生でもできることで、これを玄妙な手法のように言うのは、例の俳聖観に眩惑されているものと思われるがどうだろうか。

ところで、文体というか調子というか、そういう面からみると、生ま生ましく、そしてあらゆる力を漲らせていて、孤寥とか閑

寂とかいいたい内容面とはそぐわないのである。全く奇妙というほかはない。こう見てくると安東氏の説は十分に首肯される。

重篤の病の床で氣力の衰えと推敲不足のやむをえないこともあったとはいえ、芭蕉ほどの曠生の大俳諧師が終焉の吟としてどうしてこのような不出来の作品を残したのか。これは永久の謎である。その謎にいどんで一応の卓見を述べてみたい。

第一に芭蕉は極め付けの彼のトレードマークを並べた一世界を構築してみせることによって、風雅に憑かれた生涯の記念碑たらしめようとしたのだということ。その意味からいへばまさしくこれは辞世の句である。芭蕉自身はあえて辞世とはしなかったが、それはいかにも彼らしい逆説だといえそうである。

次に「枯野」の象徴的内容について。注釈・評論の類を見渡したところほば次の三つに収約できる。その一は孤独寂寥の境地、その二は旅する土地の幻想、その三は風雅の美的意識世界である。「枯野をかけ廻る」と連ねて主人公の心境・態度をうかがうと、第一からは漂泊者の孤心ということ、第二からは旅人の不退転の心魂というもの、第三からは風狂者の狂心といったものがそれぞれに引き出されてくる。そのどれに重点を置くかによって、この句の理解はさまざまになるわけで、例えば旅を果せなかった西国の涯を望んで夢魂が天翔っているという第二の立場にたつ解釈もあるし、わび・さびの美的寂光浄土を夢みているという第三の立場にたつた解し方もある。しかしこれらはどうも極端に走っているきらいがある。これは、第一の立場は一応裏に置いておき、第二・第三を統合しつつ、第三を中心にすえて解するのが妥当だろうと思う。夢寐にも旅を慕い、かつ風雅の世界を追い続けているというように。

文体・調子といった面について考えてみよう。先にも言ったような切字の働かないということから、句勢は内面的潜勢力によらず専ら語勢に頼っている。初五の字余りに初まり中七の内にもった語勢を集めて一気に流下してきた力を全面的に受け留めているのが「かけ廻る」である。この語は音声的にも緊迫した響きをもっている上に、人間行動を直接に表わすダイナミックな動詞である。従ってここに集中する力は、その駆け巡る行動が力強く際限もなく持続する印象を生み出してくる。芭蕉は別案として「なほかけ廻る夢心」とか「枯野を廻る夢心」とかいう名詞止の形を支考等に示したというが、それでは姿こそ整うものの、まるで力がなくなつて取るに足りない句になつてしまふ。

この句の主たるトーンをなすのは、エネルギーの持続する、暗い力に満ちた気分である。これは風雅への執着の根強さといったものを表わすように思える。一方、「枯野」という語に代表される孤寥・閑寂のトーンも無視できない。この共に風雅に関わりながら、相矛盾する動・静両トーンが統一されず分裂したままに放置されているのが、この句のすがたである。これは明らかに芭蕉にあるまじき投げやりである。しかしこれを一に芭蕉の気力の衰えに帰して済ませられるようなものであらうか。

ここで気付くのは、『笈日記』などに伝える例の芭蕉の妄執を云云した言葉である。あの言葉はいま述べたような、「枯野」の句の内部構造を解き明かしたものと見て間違いないように思われる。もっとも、あの言葉が芭蕉のその時の心を述べたものでないなどというわけでももちろんない。あれはまさに偽らぬ彼の感懐であつたらう。風雅が無用の事であり、宗教的な罪障であるという引け目を、

恐らく芭蕉は一生負い続けたのだから。死を目前にしてその感はいよいよ深まつたらう。しかもいまやまた現にこうして吟腸をしばっているのである。その業の深さ、妄執の深さは測り知れぬ。だが今更どうしようもない。妄執に狂いつつ死んでゆくほかない。無常を観念した漂泊の俳諧師として旅に死ぬ運命を静かに諦めていたはずであつたことを思うと、これは思いもよらぬ矛盾に満ちた悲しい姿である。芭蕉の気持を忖度すれば恐らくそんなことであつたらう。

それではあの言葉は嘆きであつたのか、後悔であり懺悔であつたのか。そうではあるまい。彼はあくまでも発句（それは辞書のつもりだつた）の内容として、その解き明かしたとしてそれを語つたのに違いない。死に臨んでの矛盾に満ちたお恥ずかしい心の姿を句にしてみたのだが、この句でそれがわかつてもらえるだろうかと言つてきたのだから。芭蕉はこれまでもこういう自句自解をしばしば門弟達に聞かせてきたものであつた。

芭蕉がこの句によつて表現しようとしたのは、自分の心の姿だけではなく、それを通して風狂の俳諧師の生きざま死にざまを描くことであつたと私には思われる。芭蕉の芸術にはそういうやり方が看取される。しかしそのようなわらいで自己を描くためには、作者は観照者となつて別の次元に立つていなければならぬ。他人を見るように冷徹に眺めて、あさましい姿を見届けたら、あわれなばかなやつさねと、微笑を漏しながら、突き離れた態度で描いてゆく。この間におのずからアイロニーが漂えばそれが俳意というものであり、俳諧とは結局そうしたものであらう。

芭蕉はこういう深沈な笑いを同行（連衆）に理解してもらふことを求めて、支考（それ以外の門弟もあつたかも知れない）に語りか

けたのであろう。あるいは付けの脇句を所望したのかもかもしれない。俳諧師として当然の行為である。発句というものはかかる連衆の受容と再創造の中で完成されることを誰よりも知っていた芭蕉は、その計算の上に、矛盾・分裂を留めた異体の句を敢えて発表し遺そうとしてみたのではなかったか。

気の動顛していた門弟たちは芭蕉のこの真意を理解する余裕を持たなかった。だから述懐と受け取ってしまった。「此道や行人なしに秋の暮」の寂しさをここでも芭蕉は味わねばならなかった。が、彼の心は既に枯野の静けさ寂しさの中にあつて騒がなかった。

其日は小春の空の立帰て暖なれば、障子に蠅の集り居けるをにくみて、とりもちを竹にぬりて狩りありくに、上手と下手のあるをおかしがりて、此蠅のおもはぬ病人をやどしてよろこぶらめ、と多みて申されければ、介抱の者も嬉しくてこゝろとけぬ。其後は何事もいはずなりて臨終申されしに、誰もく茫然として、終の別とは今だにおもはぬなり。

『追善之日記』のこの部分を味わってみるがよい。旬日前に妄執云々などという嘆きを本気で口にした人の態度とは到底思えない静けさではないか。これこそ芭蕉の臨終の本當の姿である。

安東氏は妄執を断ちえずに芭蕉が死んだものとして「枯野」の句の完成をあの世界での俳句に求めて、木曾義仲を同行としてさして連句を巻こうと芭蕉は考えたのだという説を出している。無類に面白く着想である。暗い妄執を嘆きながらの死であるのだったら、義仲

はまさに格好の同行であらう。

がもし、その妄執を嘆く境地を脱け出していたのだとしたら、風雅のために修羅道に堕ちることを甘受すると心決定した静けさになるのだとしたら、——あの世界での同行は西行か宗祇以外に考えられようか。いずれにせよ、「枯野」の句の完成はあの世界に持ち越されなければならぬことにはかわりはないが。

最後の句の完成を死後に持ち越すということは、彼自身の芸術を肉体の死によつて消滅させないための必死の工夫であつて、またそこには風雅無限の念いが託されていたのであろう。

それにしても、自己の死を詠んで辞世的性格を持たせた発句において、その真の完成を遠く己れの死後にまで延長させ、それによつて芸術生命の無限持続を想わせる力を内包せしめるというディアルクティークを操る妙技を、臨終間近い病の床で企て得たのだとしたら、その精神力、その俳諧師魂のしたたかさは、まさに舌を巻かしめるものといわねばならない。

「枯野」の句碑がもう一基、天王寺区下寺町の円成院という寺にあるのでそちらに行く。その寺院町の東一帯は夕陽丘の台地で、その南部の伶人町にある星光学園という学校の構内の一角が有名な料亭だった浮瀬の跡である。芭蕉は浮瀬の俳席に出て、ここで「此道や」の吟を発表した。

すぐ近くに新清水と俗称される寺院がある。その境内からは西方の展望が開け、芭蕉の孤心の寂しさと風雅の遙けさを偲ぶにふさわしい所である。